

宗教教育の意義

——仏教よりの「こころの教育」を目指して——

佐々木 惠 精

はじめに

みなさん、こんにちは。ただいまは、学長の一郷先生から身に余るご紹介をいただきました。一郷先生も、それからこちらの研究所所長の荒牧先生も、実は私の学生時代から大変なお世話になった大先輩で、私のようなものがここでしゃべるのはどうも……と思いつながら、お断りもできず寄せていただいた次第です。今日は、講題に「宗教教育の意義」という大きなタイトルを挙げましたが、先ほど紹介ありましたように、

京都女子大学で九十九年、仏教学を担当していました、その時の経験を踏まえて、ということになります。大学で宗教的なことに触れることが学生にとってどれほど大事なことかということはいくらかでもお話できたら、と思っております。

ここ、京都光華女子大学さまも、特に親鸞聖人の教えを建学の精神とされているわけですから、同じ仲間のような気持ちでおります。私も実はもう十数年前に、ちょうど今回と同じような機会をいただき、こちらに寄せていただいたことがあり、ご縁が深いことだと思っております。

大学キャンパスでの学生生活 — 千葉乗隆先生のこと —

まず初めに導入的な意味で、皆さんにご紹介したい話があります。私ごとですが、この春先に大急ぎでまとめた随想録『香りに染まりて』の冒頭にも紹介したものです。もう十年ほど前のことですが、ある話を聞いて非常に感動したことがあります。それは、龍谷大学の学長をされていた千葉乗隆先生がされた話です。残念ながらこの

宗教教育の意義

四月十二日、満八十七歳を迎える直前に、急性心不全でお亡くなりになられた、この千葉先生は、日本の仏教史、とりわけ真宗史の研究に没頭され、その方面では世界的な権威で、それでいて非常に温厚で、親鸞聖人の教えにも非常に深く傾倒されている素晴らしい先生です。しかも眼光鋭く、間違ったことがあると厳しく指摘されるところもお持ちです。その先生の書物の中に、自らの学生時代のことを紹介されている。それを、ここでまず紹介しましょう。

先生が大学へ入学されて間もない頃のことです。千葉先生は、四国は徳島市からずつと西の山手へ入ったところに美馬市美馬町という町があります、その随分大きなお寺のご出身で、父上の友だちで、黄檗宗の榊原さかきばら徳草とくそう先生の浄住寺という禅寺に下宿された。この榊原先生も非常に有名なお方で、禅宗のお坊さんなのに親鸞聖人の教えを非常に深く味わっておられる。たぶんお父さんの親友であることからこの禅寺に下宿されることとなったのでしょう。これは、先生が龍谷大学へ入学された当初のお話です。皆さんも大学に入学した当初は、半分ウキウキした気持ちもあつたでしょうが、だんだん慣れてくると、毎日の授業に出るのもしんどくなつてきて、おもしろく

ない授業には休みがちになるかもしれないですね。この千葉先生が、皆さんとちよūdと同じ世代のとき、授業が面白くないものについては、授業に行かずに下宿の部屋でウロウロしていた。すると、ご住職の榊原先生が、「千葉さん、あんたどうして大学へ行かないのか」と言われた。千葉先生は、「今日は授業が休講なんです。だからここにいます」と答えられた——おそらく半分ウソをついておられたわけですね——。そうしたら、榊原先生は、即座に「授業がなくても、大学には行きなさい」と強く諭されたというんです。そして「大学には大学独自の良い香りがあるのです。大学にいますだけでその香りに育てられていくのです」と言われた。ここ京都光華女子大学の建学の精神の中にも「薫習くんじゅう」という言葉が使われていますね。「香り（薫）に染められていく」という意味ですね。まさに「薫習」ですね、大学におれば、その大学を設立し教育にあたって来られた長い歩みの中で培われてきた「香り」がある、その香りに染められていくのだというわけです。さらに、榊原先生は親鸞聖人の歌、「和讃」を引かれた。すなわち、

宗教教育の意義

染香人のその身には 香氣あるがごとくなり

これをすなはちなづけてぞ 香光莊嚴とまうすなる

という「和讃」を引かれた。皆さん、「和讃」では「恩徳讃」をご存じでしょう、親鸞聖人はこのような四句からなる、仏教を讃嘆される歌「和讃」をずいぶんたくさん作られました。その一つです。禅宗のお坊さんの榊原先生がこの歌を紹介されて、「千葉さん、あんたのところのお祖師さんの歌にも、このように歌われているじゃないですか」

と言われて懇懇と論されたわけです。この歌の意味は、ある経典に述べられていることを親鸞聖人が歌にされているのですが、「仏教の教えに触れて、仏教の香りを、あるいは阿弥陀仏の香りをいただいている人にはそれなりの香りが染みついて、おのずと仏教の香り、阿弥陀仏の慈悲の香りを醸し出すものだ」ということだと私は受け止めているんですが、この歌を紹介されて、「大学には大学の香りがある。大学のキャンパスにいるだけで、その香りに育てられていくんだ」ということを言われた。そ

れを聞かれた、若き千葉先生は、それ以来、極力大学へは出るようにしたことをご自分の随筆集の中に書いておられます。私はこの榊原先生もすごいと思うのですが、千葉先生もそれをそのまま受け止められて、「それ以来大学には極力出るようにした」と、嫌な授業でも出られるようにされたという、これも非常に素晴らしい先生などと、感動したのです。これを紹介するのは、皆さんもこうして大学に来られて、出席を取る授業には出るけれども、出席をとられないと、休もうかという気になるといのが人間の心かもしれませんが、大学に出る、出来るだけキャンパスに出かける、授業には出来るだけ出席する、そこに、おのずと「（大学の）香りをいただく。育てられていくものがある」のだと、千葉先生は素直に受け止められた、大学に出て、大学に在るだけで、その大学の雰囲気、あるいは香りが自然に身につく、これが理屈を超えて、大事なことだと思ふからなのです。

宗教教育の意義

大学生時代

授業に出たら授業に出たで、その教室の席に着いて先生と対面しているだけで、そこから教えられてくるもの、いつのまにやら身についてくるものがある、香り付けられるものがあるんですね。そういうものを是非、皆さんも大事にして欲しいと思います。とりわけ、本学は親鸞聖人の教えを建学の精神とされてこうして発展してきているわけですので、そういう香りがいっぱいあると思います。そういうものを大事にして欲しいと思うのです。人間の一生の中で、現在の皆さんの世代、十歳代後半から二十歳代前半、あるいは二十歳代全体と言ってもいいでしょうか、この時期は人間としての成長という点で、大変大事な時期であると思います。人間形成、あるいは人格形成という意味で最も充実した成熟期です。ある意味での最終段階です。もちろん生涯、人間として歩んでいく一步一步が、人間形成の一步一步であることは、年を取ってから変わらないのですが、基本的にものを考える上でも自分を深く見つめる上で

も、しつかりした視点を持つようになる、大事な時期と言えます。恋もすれば、あるいは宗教的なこと、自分の人生をも考える、自分の歩み方を振り返るといふか、そういうことができる年代です、この年代が一番大事だと思います。仏教関係の、例えば親鸞聖人にしても、あるいは皆さんが一年で勉強されている仏教学の前半には、お釈迦様の歩まれた道だとか、お釈迦様の教えに触れておられると思いますが、お釈迦様にしましても、悩みに悩んで出家されるようになっていくというのは二十代です。親鸞聖人も実は比叡山で九つの時から修行されていましたが、二十代になって自己の姿を厳しく見つめられるようになり、最終の決意をされたのは二十九歳です。比叡山を捨てて、法然上人の元で阿弥陀仏の教えに出会われ、この仏教の救済の道を歩むという最終的な決意をされたのでした。

皆さん、大学では、それぞれの専門分野で科学的な知識を身に付けていくことになりますが、その土台として、人間として、人間性を確立していく上での大事なものを身に付けることがこの大学時代、二十歳前後の非常に大事な課題だと思っております。その意味で、最初に触れました龍大の元学長の千葉先生が随筆の中に述べられている

宗教教育の意義

「大学の香りに育てられる」ことが非常に大事ではないかと思えます。これは科学的な知識を得るとか、化学式の一つ二つ覚えるとかよりも大事なことです。自分の人生を振り返り、その大学において何時となしに「人間」として育てられていく、そういうものを大事にして欲しいと思います。

私は京都女子大に十九年間、専任でおりましたが、京都女子大でもこういうような仏教的なことに触れる場があります。実は京都女子大では、「仏教学」という科目があつて、大学ですと、一回生と、三回生の二年間、前期・後期に、短期大学部ですと一、二回生に半期づつ、それぞれ必修科目として課せられます。仏教の基本理念、親鸞聖人の思想と人間性などを学ぶ講義科目ですが、その時間の一部を使って「礼拝」と呼ぶ行事を行っています。昔（二十年以上前まで）は全学的に週に一回だけ「礼拝の時間」を設け、学生たちが自由に参加する機会としていたようですが、自由参加となるとなかなか参加しないですね。やっぱり用事もあるし、今までそういうことに慣れてない学生たちがほとんどで……。皆さんもそうでしょ。仏教的なことに触れることそのものが大学に来て初めてという方が多いでしょう。——私はお寺で育ちまし

だが、皆さんの年頃にはまだ仏教の「ぶ」の字も知らなかった。お寺の本堂で正座してお参りする経験、足が痛いと思いつながらお参りしたことはあるが、それだけのことでした。大学へ入って初めて「仏教」に触れるようになったのです。——その意味で、大学へ入って「仏教学」という科目が、しかも必修科目であることが、私は非常に大事だと思うのです。仏教的な考え、視点を学ぶことが、自分の人生を深く見つめる契機となるのですから。しかも、私がいた京都女子大では、「仏教学」の時間の一部すなわち月一回で前期・後期各三回を、「礼拝の時間」に当てています。その時間帯は、受講生は礼拝堂に入り、礼拝の作法に基づく礼拝式典があり、続いて仏教的な講話を拝聴する。それは、仏教的な講話や先生方の人生経験、あるいは学問観など、いろんな角度からの講話を聞く、そのようにして仏教的、宗教的な雰囲気に触れるという時間を持っています。静かに自分を振り返る時間にもなります。そういう「礼拝」に出ている時に、何時とはなしに、その大学の香りが身に染みついてくる。——別に「仏教徒になるべし」というのでなくて、そういう中で育まれていくものがその後の人生の大きなエネルギーの源になっていくということが大事なのです。——そんな

宗教教育の意義

なふうに思います。そういう意味で、皆さん、今日こうして出席されている学生さんは、おそらく我が心を振り返る時間にもなり、今こうして生きているということ深く見つめるよい機会となる、それが大事なことです。そのように思います。

仏教の基本理念、仏教のこころに触れて — 縁起をおもう —

私は、先ほど言いましたように、十九年間、京都女子大で専任の教員として勤めさせてもらって、この三月で定年退職となりましたが、退職を迎えるにあたり、とりわけ三月頃になって、これまでを振り返りまして、十九年間、ここで本当に育てられたなどということをつくづくと思いました。皆さんもよく聞かれる言葉で、「おかげさまで」とか、「良いご縁に恵まりました」とか、という言葉がありますね。私はこの三月に入ってから、いよいよその言葉の重みを深く感じるようになりました。「おかげさま」とか「良いご縁に恵まれた」という、この言葉は、その深い意味を込めて英語に翻訳することはとてもできない言葉なのです。仏教の精神がその中であって生

まれてきた言葉ですから、仏教の伝統のないところにはない言葉なのです。そのことにちよつと触れたいと思います。

これは、皆さんも仏教の時間におそらく聞いておられると思います。「縁起」という言葉をレジメに挙げています。皆さん、どうですか。我々が現代の日本語で使っている「縁起」という言葉は全然違う意味で使いますね。「そんな縁起の悪いこと言わないで」とか、あるいは、朝、霊柩車に出会ったら——霊柩車を不吉なものとするのがおかしいのですが——、「今日は朝から縁起が悪い」とか、言う。現在の普通の使い方はこのようですが、元々の「縁起」という言葉は、そのような意味とは全く違います。その本来の仏教の「縁起」の心です。これが大事だということです。その「縁起」の思想から「おかげさまだなあ」という言葉が生まれてきたと私は思うのです、仏教の中の素晴らしい言葉が。これは、ブツダ、お釈迦様が「縁起の道理に基づいて最高の真実を悟られた」といわれるように、縁起思想というのは仏教の柱であり、土台なのです。説明すれば一言の言葉になります。——「あらゆるものは、それを生み出した原因と、さまざまな縁によって生じてきているのである」という大原

宗教教育の意義

則であるということになります。これが、ただ単に科学的なことを知識の上で原因・結果がこういう繋がりを持つているというように客観的に見るだけでなく、仏教で言う縁起観、あるいは縁起の心というのは、この私がこうして命あるものとして存在している、その姿が縁起している姿であると、そのように受け止めていく。そうすると、「私」は、日頃は自分の力で動き回り、自分の力で生きていくという思いですが、そうではなくていろいろなものが縁起しているのだと気付かされます。

—「この私」の問題としてとらえること、「この私」のうえに見つめること

「私」ひとりで生きていくように思っていたが、実は、いろんなものが私を生かす力になっている。いろんな条件が揃って今の私が存在しているというわけです。「縁起」とは、この私の姿を縁起的に見つめるところに大きな意味があります。そういうところにこそ、仏教的な視点というものがあられるわけです。「縁起」の道理については、おそらく皆さんは一回生の「仏教」を学ぶ必修科目の中で勉強されていると思いますので、それ以上理屈っぽい話はおきますが、この縁起という見方から私を見つめ

ていくと、そこにこうして生きている姿、いつ何時死ぬかわからない命ですけども、いろんなもののお陰で生きているのだなということをつくづくと思わされる。私は十九年間大学で教鞭をとってきて、「一生懸命、仏教学を学生たちに教えてきた」という気持ちでいたのですが、退職の時になって振り返ってみると、十九年間、ずっとその大学にいて、学生さんからも、周りのものからも、導かれ、教えられてきていたのだという思いが強いです。仏教の勉強をして講義するということも、そこに学生がいなければ話す機会はない、学生さんたちがいてくれるお陰で、なんとか「仏教」について語る、さらにどのように話したらいいか、と勉強させてもらうことにもなる。……などと、思いますと、学生に育てられ、先輩に育てられ、あるいは後輩の先生方に育てられた、そういう時間であったなと思われるのです。「お陰さまだったな」と思うのです。

—「縁起」から生れるところ — 「おかげさま」のところ —

そこで、このような縁起のところに関連して仏教のことを挙げましょう。まずそ

宗教教育の意義

の一つは、仏教の古い歌です。恐らくゴータマ・ブツダ、お釈迦様の時代から歌われていたものがあると思われるくらい古いものを残している『法句経』、あるいはパーリ語で『ダンマパダ』という仏典、その中に歌われている歌です。

生まれたことはありがたく（＝難しく）

生きることもありがたい

法くち聞くこともありがたく

仏陀の出世もありがたい

（一八二）

この「ありがたい」という言葉は、現在我々が「ありがとうございます」とか「ああ、ありがたいことだ」と使う、そこには先ほどの「おかげさま」という言葉と共通する意味合いがありますね。感謝する心があります。元々はこの「ありがたい」というのは、非常に稀なこと、とてもあり得ないことだという意味なのです。すなわち「有難し」で、「とてもあり得ないことだ」というわけです。この歌は、こうして生ま

れてきたこと、人間として生まれ難い命をいただいで生まれてきたこと、これは大変
 稀なことだ、(その意味で尊い素晴らしいことだ) という意味ですね。「縁起」から見
 ますと、いろんなことが関係し合って、今の命、私の命になっている、それは、ただ
 単に父親と母親がそこにいたからだけじゃないのです——そういう親子の繋がりだけ
 で見ても、おじいちゃんとおばあちゃんがおられた、ひいおじいちゃんとひいおばあ
 ちゃんがおられた……ということもあります——、地球があり、日本というこの土地
 があり、村の人たちとの関係、自然の営みがあり、それらさまざまなことがらが関係
 し合って、こうして今ここに命をいただいでいる。生まれたことは本当に稀なること
 なのです。生きることもありがたい。そもそも死につつある身であります——皆さん
 仏教の中で学ばれたでしょう、お釈迦様が最初に説かれた説法で「人生は苦である」
 と説かれ、「その姿は生まれてきて、年取り、病氣して、死んでいくのである」と言
 われている。死につつあるのが我々の存在です——。そこにこうして一瞬一瞬の命を
 ささまざまな関係の中でいただいでいる。生きることは稀なることなのです。さらに、
 その中で法くちを聞く、仏教の真実の教えに出会える。これはなおさらに稀なことだとい

宗教教育の意義

うわけです。そして、お釈迦様のようなブッダがこうして出てこられ、そのブッダに出会うということは本当に稀なことなのだと歌われる。そこには、こうして命をいただいているということが、どれほど尊いことかという意味も示されていると言えますが、まさにこの歌の根っこには、「縁起しているこの私」という眼まなこがあるわけです。全てが縁起して存在している、その中において稀なる命をいただいて今ここに存在しているのです。ほんやりしているわけにはイカンということになります。そういう歌です。

この、非常に得難いご縁をいただいて生きていくという、あるいは「おかげさま」という、そういう心について、親鸞聖人はどのように示されているか、聖人にどのような言葉があるのか、少し触れたいと思います。実は、親鸞聖人は「縁起」だとか、インド以来の仏教でしばしば説かれる「無常」とか、「無我」とか、を直接自らのご著書の中で語っておられるところはほとんどありません。ですが、当然、釈尊、ゴータマ・ブッダの教えを受けておられますので、その心は親鸞聖人の思想の根っこにあります。

一つは、親鸞聖人のライフワークと言うべき著書は『教行信証』ですが、これはまたすごい書物です。論文と言ってもいいし、仏教に出会った喜びを語られている書物だと言ってもいいし、感謝の心を表している書物だとも言えます、非常に不思議な、しかし本当に読もうと思うと難しい、内容の濃いご著書で、日本の思想界を代表する著書の一つとも言えます。この『教行信証』の冒頭に序文があり、そこに「遠く宿縁を慶べ」という言葉があります。この「宿縁」という言葉は、まず「宿^{ぐと}」というのは「過去の」という意味で、ずっと過去から続いてきている縁ということですね。序文の文脈から言うと、この「遠く宿縁を慶べ」というのは、親鸞聖人が「仏教に出会い、お師匠さんである法然上人に出会って、そして阿弥陀仏の大きなはたらき、慈悲のはたらきに救われていくという教えを身に得ることができた。その教えに浴することができた。それは、過去のさまざまなご縁、インドの釈尊以来の祖師たちのご縁、阿弥陀仏の教えに出会ったご縁などを、慶ばせていただかねば」と、慶んでおられるお姿だと言えます。

親鸞というお方は九つで出家して、比叡山で二十年間も厳しい修行をされていた

宗教教育の意義

が、それでも（愚かな自分に悟りはとても開けない、どうしたらいいのだろう？）と悩み抜かれて、法然上人を訪ね、仏の方からの大きなはたらき（阿弥陀如来の大慈悲、本願の働き）に乗せていただくという道がここにあるのだということを教えられた。そこに至るまで、実際に九つで出家されてから二十年の歳月があったわけですから、もちろん、ゴータマ・ブツダ、お釈迦様が悟りを開かれて以来の仏教の歴史もあります、などなど、非常に遠くの過去からのご縁があつて、私はこうして仏教の大きなおはたらきの中に浴することができた、浴させていただいている、そういう心を披歴されている。いろんなご縁に恵まれた、それを慶ばなくてはならないというわけです。もう一つは、皆さんよくご存じの歌、私たちはこれを「恩徳讃」と呼んでいます。親鸞聖人の『和讃』の中で特に親しまれている歌です。親鸞聖人の御和讃には、普通「三帖和讃」と言われる三部作がありますが、その中の『正像末和讃』の一番最後にこれが採録されています。

如来大悲の恩徳は 身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も ほねをくだきても謝すべし

この歌は、京都女子大では、同窓会などで同窓の方々が三十年、四〇年ぶりに集まると、必ずみんなで歌われる、そしてなつかしきで感無量になられる。涙ながらに学生時代を懐かしみ、この歌に出会えたことを喜んでおられる卒業生が随分おられます。すごいことだなと思います。が、「恩徳讃」は、皆さんも度々唱和されているからよくご存じでしょう。その第一句の「如来大悲の恩徳」ですが、如来というのはブツダのことです。阿弥陀仏です、その仏の働き、大慈悲の働き。それに浴して救われていく道を与えられた。眼まなこが開かされた。そのご恩は「身を粉にしても報ずべし」、感謝しなくてはならないというわけです。感謝してもしきれないほどだと歌っておられるんです。それから第三句の「師主知識の恩徳」、師主とはお師匠様（仏教の先生）、知識もよき導き手すなわちお師匠様という意味で、ゴータマ・ブツダ、お釈迦様やそれ以来の仏教の学者とか祖師方。そういう人たちが、この私たちが触れられる仏教をずっと伝えてくださった、そのご恩も計り知れない、骨を砕いても感謝せずにおれな

宗教教育の意義

いと歌われる、すごい歌ですね。素晴らしい歌です。ここにも、ある意味では、私は「縁起的に見つめられている」眼まなこがその根元にあると思います。そこには「私はいろんなもののご縁を得て、そのお陰によって仏教に出会い、育てられてきたんだ」という親鸞聖人の深い思いがあります。そういう心を是非皆さんも味わっていただけたらなと思うわけです。

そこで、残った時間でちょっと身近な事例を、二つほど紹介したい。

東井義雄先生の著書から（その1） —のどちんこ（口蓋垂）の役目

教育関係の専攻の方はひょっとしてこの先生の名前を聞いておられると思います。が、東井義雄先生とおっしゃる方、もうだいぶ前の方で、私から見てもお父さんかおじいさんに当たるくらいの方ですが、明治、大正、昭和と生きられた方です。この先生は、山陰の山の中の小さなお寺育ちとのことで、山奥の貧しいところのご出身ですね。その中で自分は先生になりたいという気持ちを持っておられたようです。

が、お寺が貧しいものだから進学することがなかなか難しい。当時は師範学校ですね、先生になるための学校に、少し遅れてから進学され、苦労に苦労を重ねられて小学校の先生になられた。そして体当たりで子どもたちに接し、心から子どもたちを思い厳しくも温かい教育に努力された。後には校長先生になり、中学校の校長先生もやられ、校長退職後は、短大の先生にもなられたが、その後、長い間のご苦労の経験を生かして、あちこちで子どもたちの教育ということについて講演をされていました。教育の在り方などについて書物も書いておられます。そういうものの中で紹介されている一節です。

この先生もお寺生まれなので、私も寺育ちではありませんけれども、小さい頃とか、若い頃、少年、青年の頃は、お寺育ちといっても、訳がわからずで、とにかく「阿弥陀さんの前に座れ」と言われて座る、足は痛い。そんな気持ちしかありません。この先生はそういうことを、ご自身の書物で正直に書いておられます。小さい時からお寺に関係する門信徒の家々を廻って『正信偈』をあげる。『阿弥陀経』の経文きょうもんを、「仏説 阿弥陀経……」と朗誦する、お経さんを唱えるのですが、そういうことを

宗教教育の意義

しながら、「こんなことしたって何になるんだろう」と思いながらあげていたということを書いております。その中に、でもやっぱりお寺の方ですね、経典に述べられていること、そら誦んずるくらいにお経さんのこと覚えていきますから、暗誦（朗誦）するうちに、脳裏に漢字が浮かび出てくるくらいになっておられた。だからでしょう、ちよつとした時に「ああ、そうだったか」と、経典の文字を思い浮かべて、思われたという話です。ここに挙げる事例は、先生の書物の中にいろいろ紹介されているひとつ、「のどちゃん」というものです。皆さん「のどちゃん」をご存知ですね。どんな役目をしているかご存じですね。どうですか……？ 知らない？ ……そうですね、じゃあ話しいがありますね。このような話です——

東井先生が、六年生か五年生くらいのクラスを担当されていて、学年の終わりの時間での話です。もうこれで本年度も終わりだという時に、子どもたちの前で、「さあ、今日で三学期終わりだ、みんな、何か質問あるか？」と言われた。すると、いつも元気の良い男の子が「ハイッ、先生！」と、大声で手を挙げたという。その子は日頃、元気いっぱい、家が貧しいので朝三時半に起きて新聞配達をして、それから帰

つてきてお風呂に入り、朝ご飯を食べて、勉強して、そして、学校へ来るという子です。母一人子一人の家庭で、お母さんが厳しく、「お前、こんなことをしているからといって、学校で寝るようなことがあったら、新聞配達なんてやめろよ」というくらいに気丈なお母さん。この子も気丈で、授業中は力を込めて目をぱっちりと開けて聞いているという、そういう子です。それが元氣良く手を挙げたので、先生はビックリして「あいつ、また元氣いいこと、何を言い出すんだろう？」とと思って「何だ？」と問い返すと、「先生、喉を、口を、ぐわぁって開けると喉の奥にぶらつと下がった、気持ち悪いものがあるけど、あれ一体何するもんですか？」と。東井義雄先生はその時、その役目など知らなかったわけです。「すまん、申し訳ないが先生にも分かん、今晩一晚勉強して、調べてから明日返事するから待ってくれ」と言われた。この辺が正直ですね。先生というと、だいたい自分の知らないことを誤魔化す傾向がある、こういう時にね。でもこの先生は真つ正直で、その日図書室で一生懸命調べてみた、そこでビックリされたわけです。そして最終的には、「あのやんちゃ坊主の小学生の子どもに私は教えられた。感謝せなアカン」という気持ちになったという話で

宗教教育の意義

す。

先生が「のどちんこ」を調べてみたら、正式には「口蓋垂」と言い、その役目は、というと、自分では何も知らないでいるのに、この「のどちんこ」が、ご飯を飲み込む時には肺へ通ずる気管を蓋してくれる、そして何も知らないうちにご飯がすつと胃袋に入る。そういう交通整理をしてくれていたというわけです。「何ということか」という、この先生の驚き方がまたすごい。もちろん何も食べない時、すなわち、息をしている時には気管の蓋を開けて自由に呼吸ができるようになるわけです。これが不都合を起こしている時も蓋をしていたら窒息してしまう、あるいはいつも開いていたら気管の方へご飯が行って死にそうになる。ところが「自分は何も知らないでいる」のに、のどちんこは、そのように一生懸命、私が生きていくうえで大事な仕事をしてくれていたと、驚かれたのです。この話を聞いてどう思われますか？「それ（のどちんこ）は私の一部分じゃないか」と言われるかもしれないね。しかし、この先生の驚き方はどうですか。「私の知らない間に、のどちんこが私のためにこういう仕事をしてくださっていたとは、何ということか。勿体ないことだ、ありがたいことだ」とい

う。さらに、身体のほかの機能にまで広げて見ていくと、「私の体には血液が走っている、心臓がバクバク動いている。これも、こういうふうに動いてくれている」、「今日は、今一生懸命走ったから（心臓に）速く動いてくれと、私は何も指示もしていないのに、独りでに早く動いてくれている」というように、身体のあちこちの機能について、「それぞれがこの私のために働いてくれていた」と驚き、感謝されるのでした。

実は二、三日前に私の知っている先生のお子さんで、三十七歳と七ヶ月になる息子さん突然亡くなりました。お葬式がありました。本当に悲しいこと、三十七歳です。娘さんが三人いて、一番下の子はまだ二歳だという。奥さんもお葬式のお場におられましたが、学生さんかと思うようなまだ若い奥様です、声のかけようがないほどでありました。心臓の病気だったようです。どうもこの病気は、発見が難しく、治療が難しく、何が原因かわからない病気だそうです。拡張型心不全と言われていました。その方の心臓は、少し前から調子が悪かったらしいのですが、心臓が悪いなんて気づかず倒れる間際までわからなかったようです。早くわかってもなかなか治療が難しいのだらうと思います、今の時代でも。——東井先生が驚かれたように、心臓が動いてく

宗教教育の意義

れていること自体、これは大変なことですね。——三十七歳で亡くなられたその方も
 ですし、私だって今晚、心臓が止まれば死んでしまう。運動すれば早く動き、じっと
 していたら静かに動く。最近血圧が高いのか、床について枕を下にすると、耳元でト
 クントクン…と鼓動が聞こえるんです——「ああ、ホンマやなあ。心臓動いてるくれ
 てるな」——。この東井義雄先生の、ここの記事を思い出しては「心臓が動いている
 から私はこうして生きていられるのだ」と、そんな時につくづく思い、でもそのまま
 寝ちゃうんですが……。東井先生は、「のどちんこ」の機能を調べることで、「この私
 がいろんなものの支えがあつてこうして尊い命を、いつ何時死ぬかわからない命を、
 支えられて生きているんだなあ」と、深く思われた。小学校の元氣いっぱいの子ども
 から教えられたといつて喜ばれたのですね。いろんなものが関係して生きてるとい
 う意味では、まさに「縁起している」この私、です。いろんなもののお陰で生きてい
 る。体の中にあるものの何かのバランスが崩れると私は命が途絶えるんです。不思議
 なことにちょっとした傷をしても、いつの間にかやら自然に元に近い状態に治ってい
 る、体のバランスがおかしくなっていると変な状態になるかもしれない。視野を

さらに広げると、宇宙全体の大きな働きの中に私は命をいただいていると、そのようにも受け止められるんじゃないかと思っています。

東井先生が、「のどちんこ」に感動されて思い起こされた親鸞聖人のお言葉が、

「凡^{ほん}聖^{じょう}逆^{ぎやく}謗^{ぼう}齊^{さい}廻^え入^{にゅう}」(凡・聖・逆・謗、齊しく廻入す)

という句ですが、これを詳しく説明するには親鸞聖人の作られている歌『正信偈』を説明しないとできないので申し上げますが、この東井先生はいつも棒読みしていた、「帰命無量寿如来 南無不可思議光……」と唱えて、親鸞聖人の作られた歌を漢文のまま棒読みしていた。そして「こんなもの、唱えても仕方ないのに……」とそれまで思っていたのに、「いろんなもののお陰で私は、死んでいくはずのこの体を生かしていただいている」と、そう思った時に、親鸞聖人のお作りになった『正信偈』の一つの言葉、この句がピンツと響いた。その言葉の意味はというと、

宗教教育の意義

「尊い人もバカなヤツも、悪いことしかできない奴も、みんな同じように大きな
仏の慈悲の働きによって同じように悟りの世界へと導かれているんですよ」

という、そういう一句、この一句に出会って、東井先生は、「自分一人で生きてい
たと思っていたのに、仏の大きな働きの中に私はいたんだ」ということを、この「の
どちんこ」の話をご縁に、深く味わわれたというんです。

東井義雄先生の著書から（その2）

—ある「自殺志望」の学生からの手紙

もう一つ、これは先生が学校の教員を定年で辞められた後のことです。先生は、
人々が互いにだんだん疎遠になってきている、子どもたちと親、あるいは子どもたち
同士、大人同士の共同生活の中で、お互いに疎遠になってきていることを、非常に悲
しく思っておられた。現在の社会状況を見ても、実際その通りです、悲しいことで

す。そういう中で、いろんな講演をされていた。その時の一つの出来事を記録されているのを皆さんに紹介して、皆さんにもちよつと考えてもらえたらと思います。これは「いろんなご縁のお陰で……」という趣旨とちよつと離れるようで離れてない話です——「おかげさま」ということと、直接繋がってないようにみえるかもしれませんが、深い繋がりがあるんです——。

先生の『命の根を育てる学力』というタイトルの薄い書物ですが、その中に、自殺を志望している人から速達の手紙が届いた、という話です（他に同様の電話相談があった話も記載されていますが、これは手紙の話です）。どうも手紙を出してきた女子学生は、大学生になってからもイジメられていたようです。速達の手紙の内容はどんなものかというと、「大学の学生になってからも周りの者からイジメられて仕方ない、本当に腹が立つ、死んでやれと思う」という。「もう生きていても、どこ行ってもイジメられる、どうしようもない。それで、死んでやれということ、自殺しようと思った」というんです。だけど何かの拍子にテレビを見ていたら、東井義雄先生が教育に関連して心の教育というものを話しておられた。それを耳にして何か惹かれた

宗教教育の意義

ものがあつたのでしょうか。「ああ、あの先生に一遍手紙を出してから自殺しようと思つた」といふんです。それで手紙を出した、「一つ自殺しようと思うが、その前にこの先生に相談してから」と、手紙を送ってきたというわけです。東井義雄先生はビツクリして、即返事を書いた。返事の中味の中心なことは、先生は死んでもらっちゃ困ると思つてね……、

「死のうと考えているあなたのために、死なせてなるものかと、呼吸が今もはたらいっているではありませんか。死なせてなるものか、と、心臓が、ほら、いまもあなたのために、必死ではたらいっているではありませんか。あなたは女性として生まれてきているわけですが、このことの底にも、どうか、すばらしい未来をつくっていく者を生み育てる役割を果たしておくという願いがはたらいっているではありませんか。その大きな任務を自覚し、任務をあなたが果たし終わったら、どうもご苦勞様、よくぞ女性として生まれてきた大きな任務を見事に果たしておくれた、ありがとうと、呼吸も停止してくれるでしょう、胸のドキドキも、ホツとして休んでくれるでしょう」と、そういう意味の返事を出したと言われます。もちろん女性として一生独身で仕

事をするという方もおられるでしょうが、それはそれでそうして仕事をするという場面で、いろいろな足跡を残すという素晴らしいことがありますね。そういうことを踏まえた上で、「心臓も最後にご苦勞様と言って止まってくれることでしょう」ということです。そういう手紙を速達で送ったら、その同じ学生さんから返事がまた速達で来たのです。

「人間に生まれてきたということ、殊に、男性としてではなく、女性として生まれてきたということが、こういうすばらしいことであつたのかと、自覚させていただきました。あの意地わるの友人がいてくれなかつたら、こんな大切なすばらしいことを知らずに死んでしまったと思うと、あの意地わるの友人に対しても、拝みたいような気持ちです」

という、そういう内容の返事だつたということです。この学生さんも、相談しようと思つたところに東井先生の何かに惹かれたものがあつたのですね。そして、東井先生の手紙に感動する心を持つておられたんでしよう。

我々は、自分勝手にちよつと苦しいことがあつたら「もうええや」と思つて自分で

宗教教育の意義

自分の命まで絶とうとする、勝手なものです。先ほどの「のどちんこ」の話のように、いろんなものの支えがあつてこのいのちがあり、あのいのちがあるのに、それを勝手にちよつと苦しいからといって——確かにこの世は苦しいことがいっぱいあります。それは自分にあんまりものの本当が見えてないから起こってくることなのです。——、だからといって命まで絶つことはない。こうして稀なる命をいただいている。先ほどの『ダンマパダ』にあつたように、「生まれたことはありがたく、生きることもありがたい」のです。こうして死につつあるものが、命を与えられるというのは本当に稀なこと。いろんなことのお陰の中、ご縁の中で、素晴らしい命をいただいている。そういうものを大事にしていかななくてはいけない。ちよつとした苦しいことがあつたからといって、命を絶つことがあつてはならないということです。それでも世の中ではいろんなことがあつて、精神的に病氣になつてしまつて自分で命を絶つという不幸なこともあつて、悲しいことですが、なるだけそういうことが起こらないように願いたいですね。それにはやっぱり自分というものを深く見つめる、まさにこのお釈迦様、ゴータマ・ブツダ、釈尊が示してくださつた「縁起しているこの私」という、

「縁起の道理の元にあるこの私」、そこには私たちの想像を絶するような遠い昔からの、いろんなことが関係し合ってこの私の存在が今ある、そのように受け止めることが大事でしょう。

おわりに

よく科学的には、この地球上に生命が生まれて五十億年とか三十五億年とか言い、それ以来の長いものを継続して持っていると言います。DNAの議論がそうですね、生命誕生からずっと命が続いていると、そして今の私があるんだという科学的な説明がされたりしますが、仏教の見方はそんなくらくらじゃないです。もっともっと長い歴史、あるいは広い宇宙全体のいろんなものの関係の中に今のこの私の命がある。そういう意味で自分というものを深く見つめますと、大事な命です、宇宙全体と同一年のこの命です。もちろんいろんな条件で、いつなんどき今の命が絶たれるかもしれない。そういう意味では、一刻、一刻を大事にしなくてはいけないということになりま

宗教教育の意義

す。大学において勉強するという場合には、それぞれの専門の学問的な知識、科学的な知識、あるいは技術を身に付けるのも大事です。卒業されてから仕事をしていく上で大事なことです。しかし、その根っこにはこうして「命ある私」ということを深く見つめるものがなければ、科学的な知識だけが一人走りして、例えばオウム真理教のような方向へ走ってしまった医学生とか…、のようなことになってしまう。命あること、もちろん私の側から見える範囲はほんの少しだけです。お釈迦さんが説かれたように、人間の愚かさ、自分中心の身勝手からもの見える範囲が偏っている、無知なる存在であり、本当の知恵がないものです。そうではありますが、その存在が、いろんな縁をいただいて、今こうして命をいただいているということを見つめて欲しいと思います。そういうところから見つめていく時に、初めて科学的な知識もこの私にとって生きたものになる。社会にとって生きたものになっていくのです。単なる知識じゃなく、単なる技術じゃなくて、です。そのように私は常々思っています。

ここ光華女子大学におきましても建学の精神は親鸞聖人の教えということで、私は数日前に大学のホームページを見せていただきました。冒頭に建学の精神が掲げら

れ、「仏教精神による女子教育」とうたわれています。大谷智子お裏方様の時から本学がこうして、その素晴らしい建学の心を土台にして大学があるのですから、そういうものの「香り」を是非とも身にいただいてほしいと思います。もし皆さんパソコンを操られるなら、本学のホームページをご覧になってください、建学の精神、そこに「薫習」という言葉も挙げられています。香りが匂いづけられていくことを意味しています。我々は自分の知識や努力だけで身につくものはほんわずか、知れているのです、それよりも仏教の大きな働き、宇宙的な働きがおのずと私に匂いづけられていくもの、それが非常に大事なことです。それを非常に素晴らしいものとして受け止めて行く心がまた大事です。是非、本学でこうして学ばれる方たちは、専門知識も身に付けていたただかなくてはならない、技術も身につけていたただかなくてはなりません、その根っこにある仏教の心に、是非とも、眼を据えて大学生活を送っていただきたいと思えます。

まとまらない話でしたが、五時半になりましたので、これくらいで終りとさせていただきます。

宗教教育の意義

ただまます。どうもご静聴ありがとうございました。

——二〇〇八年五月三〇日——